

## 「住吉の語り部になりたい」 シリーズ第3回

料亭つたも主人・深田正雄

2011年6月24日

### アメリカ村

戦後、名古屋栄のど真ん中に「アメリカ」があったのを御存知ですか？

太平洋戦争直後、昭和20年9月26日には進駐軍が名古屋到着、10月には米軍27000人が名古屋港に上陸、広小路大和生命ビルに司令部開設、そして、上級将校の家族住宅132世帯が翌21年8月から現在の栄2丁目に建設されました。

日本占領後、1年で大都心の中心に家族とともに居住生活するというトンデモナイ発想でした。一面焼け野原となり、生活苦にあえぐ名古屋市民には自分の家どころか、米軍の要請で一刻も早急に敵国家族の住宅建設が命令されたわけです。

用地は戦前の名古屋の都市計画に沿って寺町を中心に公園予定地（現在の白川公園）と北部分となりました。

地域の尽力者でもある紅葉屋の故・浅野甚七さんのお話をご紹介します。

「友人が通訳をしており、司令部では当初、進駐軍のプランでは東は本町と西は伏見通りとなっているとの情報を入手。名古屋の文化歴史のメイン本町御幸通りを占領されては、沽券にかかわると案じ、早速、仲間たちと焼け跡の本町に小屋建て住みつき境界を一本西に移動させた。」との武勇伝を何度も聞かされたことがあります。

アメリカ村のゲートは北側、入江町通りにあり（現在のハミルトンホテル栄近辺）周りにはキャバレーミカドや映画館など賑やかに米軍と市民と一緒に遊興できる地域となりました。住吉町の子供達は栄小学校通学にはアメリカを北廻りに毎日往復することとなり、ゲートで朝には「ハロー・・・」とスマイル顔の衛兵さんに挨拶して、手を出すとハーシーのチョコレートやリグレのチュウインガムをもらって国際交流？大好きなアメリカとなったのでした。

正雄君は小さいときにはアメリカ村が米国と思っていた次第です。そして、少年ケニアのワタルのガールフレンド「ケート」金髪の少女にあこがれていたのです。珠に村内に誘われたときの興奮は今も忘れません。緑の芝生に囲まれた住宅、靴を履いたまま入り、風呂や蒲団に足がついているのにビックリ！エアコン、キッチン、冷蔵庫・・・映画で見るアメリカの生活に感動いたしました。そして、村内学校の中で8mm映画鑑賞、本当のアメリカは海の向こうで素晴らしい発展している国であることを知り、大きくなったらアメリカで生活するのが夢となりました。そこで飲んだ真っ黒のジュースがコーラと知るのには数年の歳月がたってからのようにも思います。

祖父良矩は、このアメリカ村が名古屋の産業や文化に与えた影響を語ってくれました。

「進駐軍は占領前に日本の研究を徹底的にしていた。原爆投下予定地の名古屋の都市計画を知りつくし、いち早く区画整理を実施、寺社には60%、庶民には40%の土地の供出実施で新しい街づくりを実行させたのだ。反対すれば銃殺だとも言われたぞ！」

そして、住宅建設、造園、警備、清掃、電設工事、キャバレー・バンド、ダンス、ゴルフなど欧米の技術や文化を名古屋市民に伝承させたのでした。

戦災で全てを焼失した栄では、市内で最も早く市民の宿泊施設としてマルコウ支援を得ながら蔦茂旅館が再興されたのも昭和21年春。宿泊だけでなく、毎日、宴席が開かれ繁盛して、常駐の芸妓も数名在籍しておりました。この宿屋にも、外人さんが日本のガールフレンドとともに短時間の投宿？正雄くんはニコニコ笑顔で「コンニチハ・・・」沢山のチョコレートや25セント玉を貰って喜んでいました。住吉通り向えキャバレーメイフラワーや赤玉会館では庶民とともに遊ぶ米兵がとても明るく友好的に感じました。米軍の駐屯で多くの外貨が住吉の復興と繁栄に寄与したようです。

祖父曰く、「拳母の自動車会社が経営危機の時、朝鮮動乱の調達として500台のトラックを発注！その自動車会社は軍の発注書を持って銀行融資を得て再建した。」

本当に、アメリカ村の名古屋市民への経済・文化への貢献には感謝せねばなりません。

写真：昭和33年1月11日撮影、アメリカ村写真、この年に返還、南半分が白川公園となり北は元地主に返納されました。 中日新聞写真集より



7 1958(昭33)年1月11日撮影、中区白川公園は昭和21年から駐留軍宿舎(通称アメリカ村)として駐留軍人と家族が暮らしていた。